QOLサポーター新潟

No.19

新潟医療福祉大学
2009年4月6日発行
新潟医療福祉大学広報委員会編集

3月10日(火)、新潟市朱鷺メッセ'ウェーブマーケット(展示ホールB)'において第5回卒業式が行われ、学部生422名、大学院生18名の計440名が社会へと巣立ちました。卒業式では本学吹奏楽部や和太鼓部による演奏も行われ、会場の雰囲気を一層盛り上げてくれました。

●学長・連携教育推進会議議長対談
●くらしサイエンス
・腰痛の世界を覗いてみませんか
●学習支援及びメンタルヘルスについて
・学習支援体制について
・大学生のこころの健康
●院生研究紹介
・バイオメカニクスにおける膝前十字靱帯の負荷の計算
・精神科長期入院患者に対する集団でのコラージュ療法による効果
●新入生へのアドバイス
●学外実習体験記
・フィリピンと私と仲間達 〜かけがえのない7日間〜
・韓国語語学研修参加報告
・ロサンゼルス・フレスノ研修を終えて
・ロサンゼルス看護研修について
・University of Maineにおける英語研修旅行
●学友会紹介
●CAMPUS NEWS
●同窓会
●受験生のみなさんへ

学長・連携教育推進会議議長対談

今回は、本学の最大の特色である連携教育の目的や実施している内容などについて、高橋学長と本学連携教育推進会議議長の真柄教授に対談していただきました。

学長：現在、保健、医療、福祉の分野には、たくさんの専門職があります。医学の進歩によって医療内容が複雑化し、それぞれの専門性の向上が必要とされた結果、様々な専門職が確立されたからです。ただそれぞれの専門性を追求するのはいいのですが、それだけでは全てをカバーしきれません。特に高齢者や障害をもった方への対応は多方面からサポートすべきで、そのためには専門職間のチームワークが必要です。それこそ真柄先生が専門のリハビリテーション医学では、様々な専門職と調整しながら治療を進めますね。今はチーム医療や医療と福祉の連携が大変重要となってきているのですが、このチームワーク医療を教育段階から行うというのが連携教育です。本学では開学以来、保健・医療・福祉の総合大学という利点を活かし連携教育に力を注いできました。特に真柄先生には長年に渡る現場での経験を活かしていただきたいということで、本学の連携教育会議推進議長をご担当していただいてます。

真柄：私はリハビリテーション科医として約30年間、病院でリハビリテーションチームの運営に関わってきたのですが、連携は当たり前のことでした。総合病院では理学療法士や作業療法士など関連職種が多いため、一人の患者さんに対してチームで同じ目標を持ってリハビリを行うのです。そのときに必要なのが、情報の共有と協力、連携です。地域の医師や看護師、保健師との連携も大切です。それがうまくいけば大変効率良くリハビリできますが、うまくいかなければ失敗することもあります。私は大学で連携教育を担当することになり、連携教育が体系化しているイギリスにも研修で行ったのですが、現在その必要性を再認識しています。イギリスの連携教育は、医師やセラピストの資格を取るための必須科目であるだけに質が高いです。

学長：海外での連携教育はとてもいい参考になりますね。国内でも本学が中心として提唱した『日本保健医療福祉連携教育学会』がH20年に設立され、全国で連携教育を取り入れる教育機関が増えています。この学会は当初、『日本リハビリテーション連携科学学会』の分科会のひとつとしてスタートしたのですが、その後、医療や福祉のスムーズな連携のためには、基本となる教育を押さえる必要があるとの理由から学会として設立されました。既に、医学教育学会、看護学教育学会は活発に活動していますが、その他の健康関連専門職の教育学会は未だありません。それで、保健医療福祉分野の連携を目指すために、その最も川上に位置する高等教育機関における連携教育の充実を目標に、この設立を提案しました。

真柄：連携教育については日本全国で期待が高まっていますね。本学では開学以来ずっと連携教育を取り入れていますが、現在は学科の枠を超えて1年次の基礎ゼミから4年次の連携総合ゼミまで、段階的に学べるカリキュラムを組んでいます。中でも連携総合ゼミは4年間勉強したことの総仕上げで、数名のチームで一事例の問題点を分析し、いかに解決するかの計画を立て模擬的に実行します。要は病院で行われる事例検討会議のシミュレーションです。昨年度は、地域での包括的な医療ケアシステム構築に全国でも率先して取り組んでおられる広島県尾道市の医師会長の先生より、インターネットを通じて現場の視点からのご指導をいただきました。この他に、連携教育の指導者養成を目的とし、学内の教員を対象とした国際ミニシンポジウムやイギリス海外研修なども実施しています。

新潟医療福祉大学
学長
髙橋榮明

医療技術学部義肢装具自立支援学科教授
連携教育推進会議議長
真柄　彰

学長：現場の先生方の指導や講義は、学生も教員も学ぶことが多くありますね。またイギリスやアメリカといった海外の先生方の講義も大変勉強になります。今後も国内はもとより、インターナショナルに連携教育を結んでいきたいですね。

真柄：そうですね。学内の教員もそうですが、連携総合ゼミに参加した学生からは、「参加して本当によかった」、「連携の重要性を認識できた」という声が多く、「違う視点から見ることができた」、「自分では思いつかない発想が生まれる」、「チームとしてのパワーが上がる」といった感想もありました。素晴らしいことなので、今後は連携教育の指導教員を多く養成して、年間を通して連携教育を進めたいと思っています。

学長：同感です。連携教育を進めるにあたっては、3つのレベルがあります。1つ目は教員の向上を含めた学内の連携教育の強化です。2つ目は県内の大学間の連携支援事業の推進。包括的な支援事業として連携教育を進めて、新潟県の大学の魅力を高めることが大切です。3つ目は全国レベルの違う学部・学科の大学間連携です。日本保健医療福祉連携教育学会などを通じて、医師と看護師だけでなく、リハビリ職、管理栄養士、福祉職などとも理解を深めて、日ごろの健康増進を広めなければいけません。本学としては、今後もこのようにいろいろなレベルから、連携教育を発信していきたいと思っています。

「腰痛」の世界を覗いてみませんか

理学療法学科 准教授　佐藤 成登志

皆さんは今までに腰痛を経験したことがありますか?「はい」と答えた人が圧倒的に多いことでしょう。腰痛の生涯発生率は50～80%と言われています。また人の体の中で最も痛みを訴える部位は、腰と膝だと言われています。この痛みは時に数ヶ月、数年と長引き、慢性的な痛みとなることがあります。その結果として、2003年のアメリカにおける痛みによる労働生産力の損失推計額は、年間9兆円にのぼり、医療費・就労不可能の補償費や介護費用などを加えると、社会経済の損失は膨大であったと報告されています。

さて何故腰痛は起きるのでしょうか?腰が痛くて病院や近隣の整形外科に行くと「レントゲンでは骨は大丈夫」といわれて安心したものの、何故痛みがでるのか疑問に思ったことはありませんか?腰が痛くてやがて足がシビレてくると坐骨神経痛かと思ってはいませんか?何故腰痛を何度も繰り返したり、慢性的な痛みになったりするのでしょうか?こんな腰痛に関する多くの疑問をお持ちではないでしょうか?今回のくらしサイエンスでは、腰痛に関する豆知識と20年以上理学療法を行ってきた筆者の腰痛に関するエピソードをお伝えします。

「腰痛はヒトだけ?」ヒトは直立二足歩行になり、手や言葉の機能が発達するに伴い脳が発達して頭部の重量が増大しました。この結果、脊椎（せきつい）（約30個の椎骨から構成）が前後に弯曲（わんきょく）しながら体のバランスをとるようになりました（図1）。重くなった頭を頚椎が支え、頭部と頚椎の重みを胸椎が支え、さらに胸椎の下にある腰椎が頭から胸椎までを支えているのです。ヒトは手や言葉の素晴らしい機能を得た引き換えに「腰痛」という代償を支払うこととなったのです。腰痛は四足動物には無く、ヒトだけだと言われてきましたが、胴長の四足動物の中には肥満や加齢により腰痛を持つ動物がいるようです。ペットを過保護に育てる動物愛好家の問題でしょうか（私見）?

「腰痛の原因はなに?」腰痛は様々な原因により引き起こされ、**器質的要因**と**非器質的要因**とに大きく分けられます。**器質的要因**とは、画像検査など明らかに体に何かしらの原因がある場合をいい、脊椎内の要因と脊椎以外の要因による腰痛とに分けられます。前者は脊椎に由来するものと神経に由来するものとがあり、組織の変性、感染、炎症、腫瘍、外傷や機能障害によって生じます。変形性腰椎症、腰椎椎間板ヘルニアや坐骨神経痛などがその典型例です。後者は、消化器系・婦人科系の疾患に関連したり、動脈瘤や末梢血管系疾患に関係したりして腰痛や坐骨神経痛様の症状を呈します。**非器質的要因**による腰痛は、画像検査結果などには原因が無く、心理的・社会的要因に深い関与が疑われる腰痛です。このように腰痛の原因は多様であり、痛みが慢性化してくると、さらに原因が重複したり、連続的あるいは交代的におこったりすることがあります。特に近年、腰痛の捉え方が変化してきています。従来は、腰痛の原因が脊椎や椎間板（椎骨間にある油圧システムで、80%が水分で脊椎にかかる圧を分散させます。）などの画像で診断できる「脊椎障害」と考えられていました。しかし著しい治療効果を得ることができないことを受け、「形態・機能障害」として捉えられてきています。これは、脊椎や椎間板の損傷・障害のみでなく、多様な因子、特に心理的・社会的因子が早期から腰痛の増悪や遷延化に深く関与していると言われています。つまり、日常生活の物理的環境・姿勢・家族関係・社会的関係など生活上で取り巻く多くの事が腰痛に影響しているわけです。

筆者は、理学療法の中で「形態・機能障害」を思わせる多くの症例と接してきました。少しご紹介しましょう。「20歳代の女性、画像上は異常所見なし。時々腰痛が出ていたが最近特に痛みが強くなり来院。8cm以上のハイヒールを常に履くモデル業務をしており、ハイヒールを履くのを止めることと柔軟性を高める運動を薦めた。渋々であったがハイヒールを履かなくなり数日で腰痛は消失した。」「60歳代の女性、画像上は腰椎椎間板症。2ヶ月前から腰痛があり来院。首・肩から腰部までの筋が硬くなっており、首・肩の治療のみを行い腰痛が軽減した。数回の理学療法で腰痛は消失したが、その後、再度腰痛が出現。重い物を持ったり、長い距離を歩いたり等、生活上で特別なことを行っていないかを聞いたが特に無いという返答。その後、ご主人と頻繁に喧嘩をしていたことが判明。」1症例目の腰痛の原因は、ハイヒールでした。ハイヒールを履くことにより、体の重心が前方に移動して、その代償として腰椎の前弯（前方への弯曲）が増大します（図2）。この姿勢のまま長く歩くことにより、腰部の筋に過度な負荷がかかり腰痛を引き起こしていたのです（筋内圧の上昇⇒筋内の微細血管の血流障害・交感神経の興奮⇒筋の虚血状態⇒発痛物質の産出⇒筋の痛み）。2症例目の腰痛の原因は肩の痛みとご主人との喧嘩でした。肩と腰は一つの筋肉で繋がっています。肩の痛みの後に腰の痛みが誘発されたようです。また、「腰痛は<怒り>である」とはジョン・E・サーノ博士の名言です。この症例も穏やかな生活を送ることによって腰痛が消失しました。さらにサーノ博士は、「痛みの原因が心にあることを認めた患者は、それを否定した患者に比べると、より早く改善する。」とも述べています。大変興味深いことですね。

以上の様に、腰痛は器質的な要因に加え、心理的・社会的因子、また環境や姿勢など多様な因子が複雑に絡み合っています。慢性化した腰痛では、通常触れるだけの感覚が痛みとして感じたり、脳の一部が萎縮していたりしている等の報告もあります。今後、総合的な評価とそれに伴った治療システムが確立され、多くの腰痛患者が再び腰痛の無い安心した生活に戻れることを期待しています。

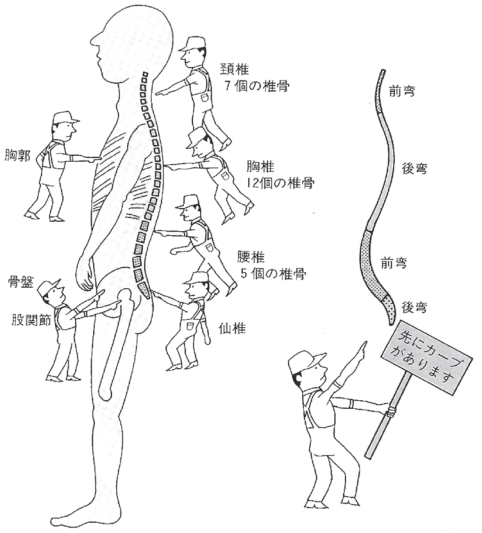


図1:脊椎の構造

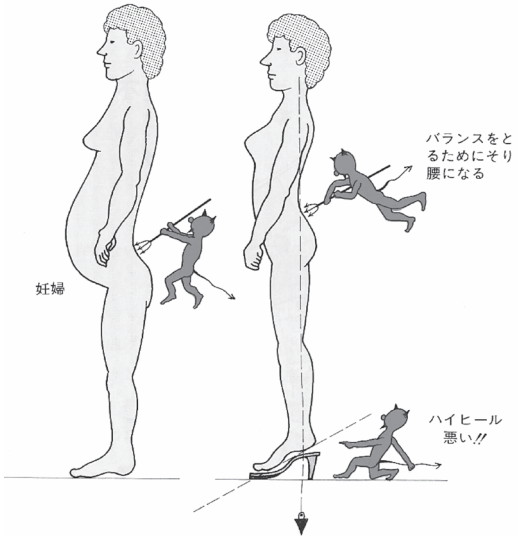


図2:妊婦やハイヒール履く女性では、腰椎の前弯が増大して腰痛を引き起こす

図1・2　引用:レネ・カリエ 著　荻島秀男 訳:正しい腰痛のなおしかた　医歯薬出版　2003

学習支援及びメンタルヘルスについて

本学では学生支援の一環で、教職員による学習支援体制を確立し、きめこまやかな学生サポートに力を入れております。今回はその取り組みについてと、本学教員によるメンタルヘルスについての記事をご紹介したいと思います。

学習支援体制について

看護学科 教授　林　千治

本学における学習支援は学習支援委員会が中心となって行っています。そこで、学習支援委員会の概要について述べます。

〈目的〉全ての学生が快適で問題なく学習できるように学習環境を向上することを目的とし、特に心身に障害のある学生及び学業不振な学生に対する支援を図っています。

〈組織〉学習支援委員会は、各学科代表者・健康管理センター代表者・関連委員会代表者（教務委員会、学生委員会、教育開発委員会）・学校医・医務室（看護師）・身体障害に関する専門家である教員・臨床心理士・精神科医・発達障害または精神障害に関する専門家である教員および事務局代表者などで構成されています。さらに委員会は以下の3つの専門部会に分かれて活動しています。

⑴疾病および身体障害者への学習支援（第1部会）
⑵精神障害・発達障害またはその疑いのある学生への学習支援（第2部会）
⑶学業不振の学生に対する学習支援（第3部会）

〈学習支援の流れ〉学習支援は次の2つの流れがあります。

⑴学生からの支援要請（相談）の場合

学生➡相談窓口（各学科・教務課・健康管理センター・就職センターなど）
＊相談窓口をつくるのではなく相談を受けた部署が窓口となる。
⬇
各学科（学科長・アドバイザー・学習支援委員・教務委員など）で協議
＊〈アドバイザー〉少人数の学生に対し1人の教員が責任者となって学生を見守るシステムで、各学科において全学年の学生全員に対して配置されている。
⬇
協議の結果、その問題が
①身体・精神など疾病・障害であり全学的な対応が必要なら
⬇
健康管理センターへ連絡
健康管理センターで内容を審査し
授業欠席・試験欠席など➡教務課へ
学習支援が必要➡学習支援委員会・各学科で対応（第1部会・第2部会）
②学科内で対応すべき問題は基本的に学科内で対応する。ただし学科内対応が困難な場合が学習支援委員会へ連絡し対応策を練る。

⑵周囲から学生の見守り

学業不振（低成績）・生活態度不良者など
学科で学生にアプローチする。
＊まず、アドバイザーが対応。さらに学習支援委員（第3部会）が対応
⬇
学科内で対応を検討する。
①身体的・精神的問題➡健康管理センターへ
学習支援が必要なら第1または第2部会へ
②生活上の問題➡学習支援員会（第3部会）・学生委員会
③学習上の問題➡学科内対応が主（学習支援委員会第3部会）
＊特にメンタルヘルス面の問題は気づきにくいので、危険信号を見逃さないこと

〈付記〉

⑴より効果的な学習支援のためには、学生が気楽に相談できる環境を作ることが重要となります。
⑵詳細は学習支援委員会で作成した学習支援ガイドラインを参照してください。

大学生のこころの健康

社会福祉学科 講師　松本京介

大学時代は「青年期」とよばれ、以下にその特徴を3つ挙げます。

①生物学的観点：２次性徴の発現から生殖能力の十分な成熟に達するまでの時期
②社会学的観点：社会のなかで一定の役割を身につけ経済的自立を達成する時期
③心理学的観点：家族外の人物や価値観に関心を移し、親から独立した行動が可能になっていく時期

ここでは、心理学的観点についてさらに述べていきます。親子の心理的距離を程よく保つには親の覚悟も必要ですが、青年にとっても極めて難しい課題です。距離が近くなりすぎると、同年代の仲間と比較して恥の感覚を持ちやすく、反対に、距離が遠くなりすぎると、親への罪悪感が生じやすいからです。多くの青年はこのような困難を抱えつつ、この時期を過ごしています。

ところが、親と異なる価値観をつくりあげていく課題を、「自立」として観念的にとらえすぎると、問題が生じることがあります。例えば、「いつまでも親に甘えてはいけない」などと思い切った行動をとってしまい、親からの「自立」が「家出」同然になされることがあります。

ある専門家は「親子関係で『自立』するために最も有効な方法は親孝行であり、最も効果の薄い方法は家出である」と「自立」について述べています。つまり、親子関係を無理やり断ち切ろうとすることは、「自立」ではなく「孤立」です。そのような閉塞状態はこころの健康にとってよいものとはいえません。

もちろん、親から「自立」するために単に親孝行すればよい、ということではありません。大切なのは、親子の関係を「切る」ことが「自立」ではないということです。親子のつながりを維持しながらも、自分の独自性を育むことが可能だということです。

青年は持ち前の純粋さのあまり、白か黒かをはっきりさせたがる傾向があります。それによって、青年期の発達課題が困難な問題に変わってしまうことがあります。白でも黒でもない、灰色の部分を抱えるには心の強さ、あるいは、ある種の鈍感さが必要で、時間がかかるものなのでしょう。

青年期は、親子関係も含め悩みがつきないものです。それらの悩みを抱えつつ、こころの健康を保つためには、気のあう仲間と過ごす時間が大切になってきます。また、自分の尊敬できる先輩や先生に相談することも役に立つかもしれません。悩みや葛藤は人を成長させます。つらいこともあるでしょうが、みなさんが大学生活で十分に実力を発揮できるよう願っています。

バイオメカニクスにおける膝前十字靱帯の負荷の計算

新潟医療福祉大学大学院 修士課程 保健学専攻 理学療法学分野2年　田中悠也

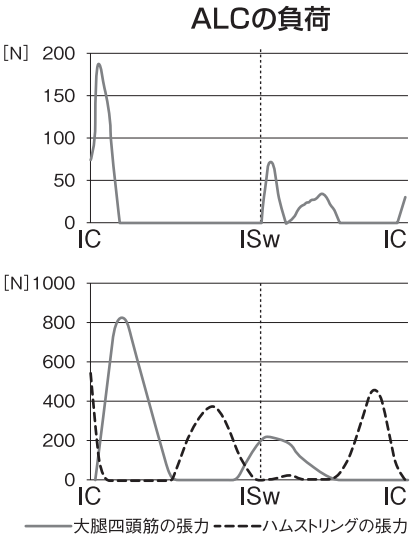
理学療法学分野の江原研究室では、博士後期課程４名、修士課程４名の計８名の学生が在籍しています。このゼミでは３次元動作解析装置（VICON MX）や床反力計（AMTI）などの機器を用いて、バイオメカニクスを基盤とした動作の解析を中心に行っています。

近年、バイオメカニクスによる研究は数多く、幅広い分野に用いられています。例えば健常者や高齢者から疾患を有する者といった幅広い対象者に、歩行や起居動作からスポーツ動作といった様々な動作などが挙げられます。バイオメカニクスの指標としては特に重心や足圧中心、関節角度、関節モーメントといった指標がよく用いられており、客観性かつ精確性の点から、研究に用いる指標としてとても有用だと言えます。また、調べるためには侵襲的にならざるを得ない筋の張力や関節の負荷といった生体内の力も計算することも可能です。筋の張力を測定することは解剖学分野や生理学分野、整形外科分野、リハビリテーション分野、体育分野といった様々な分野へ適応が広がる可能性があり、さらに筋の張力によって関節の圧迫力やせん断力といった関節への機械的な負荷が算出可能であるため、筋の張力を測定することの意義は高いと言えます。

筋の張力を計算する際、数学的手法によって関節モーメントから張力を推定するといった手段をとる必要があります。しかし、この数学的手法の妥当性に問題があり、現在も多くの研究者によって議論されているのが現状です。私の研究では推定した筋の張力を用いて、膝前十字靱帯（ACL）の負荷を計算することを目的としていますが、前段階として、現在は筋の張力を推定する数学的な手法の妥当性の検証を行っている最中です。動作としては歩行やスクワット動作、フォワードランジ動作といった様々な動作を測定し、筋電図との一致度や先行研究との一致度などから妥当性を検証しています。一例として、現段階における歩行時のACLの負荷などを記載しました。

また、研究室内の同期および先輩方の研究テーマは様々であり、他には静止立位時のバランスの指標に関する研究やバランスを崩した際のバランス制御方法の研究、さらにはキック動作における障害予防などとなっています。

江原研究室は所属する院生数が多く、様々な研究テーマを研究しているため活気のある研究室だと言えます。以上が研究紹介でした。



精神科長期入院患者に対する集団でのコラージュ療法による効果

新潟医療福祉大学大学院 修士課程 保健学専攻 作業療法学分野修了　相田陽子

今から約90年前、アメリカの作業療法協会発足に大きな貢献をした精神科医、ウィリアム・ラッシュ・ダントンは、次のように述べています。“作業は食物と水のごとく生活に不可欠なものなり…病におかされた心、体、そして魂は作業により癒されるものなり”。

作業療法は障害を持つ“ひと”への援助です。そのため、疾患の治癒に対する自然科学的な視点からの援助とともに、疾患や障害により引き起こされる生活の障害に対しての援助が必要となります。生活に対する援助は、その個別性に合わせた援助が大切であり、とくに精神障害の分野では、障害に対する影響要因は多岐にわたっているため、評価・援助の過程では個別性を尊重したものが主流でした。一方、近年、EBMが重視される中、標準化された尺度での治療効果を明らかにすることも求められてきています。

今回、上記の視点から、精神科作業療法について、標準化された尺度を用いた効果判定による比較対照試験の研究を行いました。精神科病院の長期入院患者さんに対して、コラージュという切り貼り絵の美術技法を用いた作業（図1）を集団で実施し、統計分析を行った結果、精神症状や社会的機能の改善効果を認めました。同時に実施した、患者さんへのアンケート調査や観察からは、コラージュを用いた作業療法は、患者さんの自己表現や他者とのコミュニケーションを助けていることが分かりました。作業活動や人とのつながりの治療的効果という、一見みえにくいものについて、一定の手続きを踏んだまとめができたことは、作業療法の役割について、他職種、対象者の方に対してわかりやすい作業療法を実施していく上で大きな意味を持ちます。また、コラージュを用いた作業療法について、対象者の回復過程における位置づけを、より明確にしていく必要があるという課題もみえてきました。

研究は、臨床の現場において“患者さんがよくなった！！”という治療者の思い、それをまた、次に出会う患者さんのためにより効果的な形で残し、また、同じ目標に向かう仲間と成果を共有し、さらによい方法を考えていく手段の一つです。そのためには、やはり、研究の“コツ”が役にたちます。研究における手順・配慮、統計処理の仕方、学会発表、論文への投稿など、今回の大学院での研究活動を通して様々なことを学ぶことができました。“コツ”を学び、ぼんやりしていたものがみえてくる研究の体験は、とてもおもしろいものです。興味のある方が、研究の扉をあけ、共に学びあう仲間となることを願っております。

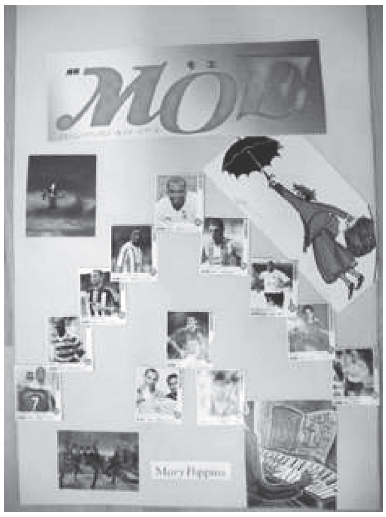


図1：コラージュ作品「題：メルヘン」

海外研修特集

本学では、海外での経験を通じて幅広い知識を身につけることを目的とし、毎年様々な海外研修を実施しています。今年度の春休みには、フィリピン研修（理学療法学科）、韓国語研修（全学科）、カリフォルニア研修（理学療法学科）、ロサンゼルス研修（看護学科）、メーン大学英語研修（全学科）の5つの研修が企画され、計38名の学生が参加しました。これら研修のうち、フィリピン研修・韓国語研修・カリフォルニア研修については参加学生からの報告、ロサンゼルス看護研修・メーン大学英語研修については、引率教員による事前指導の様子などをお伝えします。

フィリピンと私と仲間達～かけがえのない7日間～

理学療法学科4年　羽田ちひろ

私達は研修旅行で2009年2月15日～21日の7日間フィリピンに滞在した。今回の旅行のメンバーは理学療法学科の先生3名、学生6名、障害のある友人とその御家族であった。全員が無事に帰国できたことを、大変嬉しく思う。旅の概要をここに記す。

初日、フィリピンに入国。2日目、障害のある人々の自立施設Tahanang Walang Hagdanan（以下TWH）:階段のない家へ訪問。ここでは障害のある人々が職業訓練、製造・販売を行い、生計を立て共同生活をしていた。

3、4日目、地方のAngeles University Foundationと附属病院を訪問した。大学では構内や英語での授業を見学し、理学療法学科の大学生と交流する機会も持てた。翌日、病院ではリハビリも含め、様々な施設を見学した。

5日目、TWHの理学療法士・作業療法士の方と共に在宅訪問を行い、地域に根ざしたリハビリテーション（CBR）の活動を体験する事ができた。先生が治療している様子も見学できて勉強になった。また貧困層の暮らしを見て私達は考えさせられることが多かった。6日目、Santo Tomas大学へ行き、施設見学、授業への参加、学生等との交流をし、大学病院では理学療法士の方の話も聞くことができた。

今回の研修を通してフィリピンの文化や歴史、医療を知る事が出来た。出会った人々は皆、私達を温かく迎えてくれた。特に同年代の理学療法士を目指す学生と出会えたことは、本当に良い刺激になった。また障害のある友達と生活を共にし、皆で協力し合う事の大切さを学んだ。毎日密度の濃い時間を過ごす事ができ、本当に大切な仲間が出来て嬉しく思う。今回このような機会を与えて下さった先生方にも深く感謝する。この経験は私達に目標や向上心を与えてくれた。本当に有意義な旅だった。フィリピンで出会った全ての人々へサラマートゥ（ありがとう）!!

韓国語語学研修参加報告

理学療法学科2年　小柳亜友美・杉田佳澄

今回参加した語学研修は、忠南大学校で2月15日から26日の日程で行われました。忠南大学校の日語日文学科のご支援により、授業を受けさせていただきました。

研修では、韓国語会話・映像韓国語・文化体験講座という授業日程で仙台の他大学から参加した学生とともに7日間勉強させていただきました。韓国語会話では、先生が日本語で授業を進め、基本的な文法を教科書の例文を用いながら練習しました。映像韓国語では、五歳庵という映画を見て登場人物の会話の聞き取りや発音練習、文法などを勉強しました。映像韓国語は、先生が韓国語のみで授業を進めたので慣れるまでに時間がかかりましたが、この授業で韓国語の聞き取りが今まで以上にできるようになったと思います。文化体験講座では、韓国の伝統的な衣装の試着や遊び、武術や舞踊などを体験させていただき、韓国の文化を身近に感じることができました。

20日の夜から21日にかけてのホームスティでは、韓国の一般家庭での生活を体験することができました。

7日間の研修の最後には、研修のまとめとしてスピーチ大会を行いました。スピーチは韓国の思い出・感想などを韓国語で発表しました。スピーチは発音が難しく、練習から苦労が絶えませんでしたが、本番では上手く発表することができました。

25日は、韓国の歴史体験をしました。百済の時代の王の墓や国立公州博物館、公山城の見学や陶芸村でマグカップ作りを行いました。

この研修を通じて一番に感じたことは、自分の勉強不足でした。韓国の学生の皆さんはとても勉強熱心で、何事にも自分から積極的に取り組んでいく姿勢が受け取れ、私たちも見習わなければならないと思いました。そして、今回の研修を終えて、もっと韓国語と文化について学びたいと思いました。

ロサンゼルス・フレスノ研修を終えて

理学療法学科3年　牛木裕美・横山絵里花

私達は（2月27日～3月8日）10日間ロサンゼルスとフレスノに研修に行って来ました。

最初の2日間は、グランドキャニオンやチャイニーズシアター、サンタモニカなどのロサンゼルスの観光地を廻ってきました。ロサンゼルスは天候が良く青空で、町の風景がとてもきれいでした。

3日目に1日かけてアムトラックに乗ってフレスノに移動しました。フレスノで3日間授業やクリニックの見学をし、アメリカの授業はアクティブでとても学びやすいと感じました。クリニックでは、実際に患者様に理学療法をしているところを見せていただきました。2日目の夜に、学生と交流をして、英語でコミュニケーションをとって、一緒にビリヤードを楽しみました。

次の日は、早朝6時に飛行機に乗ってロサンゼルスに戻ってきました。その日は、理学療法教育では全米NO.1の南カリフォルニア大学（USC）を見学してきました。USCは設備も学生もレベルが高いと感じました。最終日はNBAとディズニーランドに行く班に分かれて、それぞれ研修最後のアメリカを楽しみました。

アメリカの学生は、授業の際に積極的に質問をしており、学びたいという意識が非常に強く、勉強に対するモチベーションの高さを感じました。この光景は日本ではあまり見られず、この研修を通して、今までは、受け身の姿勢で授業に臨んでいましたが、アメリカの学生のように、積極的に学んでいきたいと思います。

参加者氏名：３年　佐藤拓大　鈴木勝也　森幸紀
２年　牛木裕美　小島翔　須藤みゆき　高橋祐太
宮内加奈恵　横山絵里花
（各学年は研修参加時の学年です）

ロサンゼルス看護研修について

看護学科 講師　栗原 弥生

看護学科では、昨年より国際看護論の授業の一環として、海外研修を行っています。2007年度はオーストラリアに8名の学生が行ってきました。今年度は、14名の学生がアメリカ・ロサンゼルスのOSULA Education Centerで約2週間の研修を受けてくる予定です。

今回の研修では、①異文化における医療・看護の事情を理解し、国際看護の基礎知識および学習の動機づけとする。②海外での生活やコミュニケーションを体験し、日常英会話を習得する。③体験を報告することで学習を整理し、将来の学習に役立てる。という目的をあげています。

この研修では、OSULAという研修センターに宿泊します。この研修センターには講義室や体育館、プール、宿泊施設などがあり、ここが生活の拠点となります。自分達で自立した生活をします。

主な内容は、UCLA大学病院での、心臓胸部外科の専門ICU・脳外科の専門ICUなどの専門的な高度医療の見学や急性期の総合病院でER（救急外来）やICU、産婦人科の見学。さらに、がんの専門病棟、小児のICU、ホスピスの施設の見学などを行う予定です。

また、アメリカのホスピスで専門的な看護を行っている看護師に講義を受ける時間もあります。病院の見学だけではなく、アメリカの看護や医療の実際の学習も行います。

この研修の特徴的なものとしては、見学のほかに「高齢者の総合シニアコミュニティ」を訪問し、そこで生活する高齢者との交流を行います。学生達は講義の後など時間を作って集まり、英語での挨拶や風船を使ったパフォーマンスなどの練習をして、楽しく交流できるように研修の準備をしています。

また、看護学科では、3名の教員が、少しでも有意義に研修ができるように英会話の練習や渡航の準備など様々な場面で学生をサポートしており、1名はロサンゼルスに引率をします。

海外研修は、日本にはない看護や医療を学ぶと同時に、日本の看護のすばらしさを学ぶ良い機会です。今回のアメリカ研修で新しい経験をすることが、これからの人間として看護師としての成長の助けになることを期待しています。

University of Maineにおける英語研修旅行

社会福祉学科 准教授　戸出 朋子

3月15日に、6人の学生（作業療法学科1名、言語聴覚学科1名、健康スポーツ学科1名、社会福祉学科3名）が、米国University of Maineでの英語研修旅行に出発します。キャンパス内のIntensive English Instituteという英語学校に入り、午前中は英語の集中授業を受けます。午後は、Conversation Partnerというプログラムの中で、現地の学生とペアを組んで雑談等の交流を行います。滞在はホームステイですので、生活の中でも英語に触れることになります。英語研修以外には、本学にゆかりのある音楽療法士であるAllan Wittenberg氏のクリニックの見学も予定されています。

この研修旅行を単なる海外旅行で終わらせないために、事前学習から事後学習までを研修と捉えています。事前学習として、自己紹介や学科紹介の英文作成を行いました。各自、ホストファミリーに見せるための写真等を持ち寄り、それを話題に英語で雑談も行っています。また、音楽療法についての事前指導も行っています。第一段階として、音楽療法専門の本学看護学科の丸山敬子先生に講師になっていただき、レクチャー及びビデオ視聴とディスカッションを行いました。これは日本語で行われましたが、第二段階では、Wittenberg氏が書かれた英語論文の一部を読み、現地での質問事項の準備を行います。研修旅行後の学習としては、英語で報告会を持つことを目標にレポートの作成や練習に取り組むつもりです。

研修旅行それ自体は一週間ですので、旅行だけで顕著な英語力の向上を期待することはできません。しかし、それが刺激となって参加学生の視野が広がり、自ら求めて専門科目や英語の勉学にいそしむことが期待されます。

新入生へのアドバイス

設備も素晴らしいですがそれ以上に「人」が素晴らしいです

義肢装具自立支援学科3年　松矢　晃

私が在籍する義肢装具自立支援学科は、医療福祉系大学では唯一義肢装具士の国家試験受験資格が得ることの出来る学科です。私が考えるこの学科の一番の自慢は、親切で優秀な先生と明るく笑顔の絶えない学生達だと思っています。日本の歩行分析の第一人者でありながら、とても優しく、親切な授業をしてくださる学科長の江原先生をはじめとする優秀で親切な先生方。そしていつも明るく笑顔の絶えないそして何よりフレンドリーな学生が多い!義肢装具自立支援学科の自慢は設備も素晴らしいですが、それよりも「人」がとても素晴らしいです。大学生活は色々と悩むこともあると思いますが、わからないことや不安なことがあったら先生や先輩、友達などに相談して一緒にキャンパスライフを楽しみましょう!

ボランティア活動を通じて「食」の大切さを伝えています

健康栄養学科3年　長谷川一幾

健康栄養学科では、地域の小学校に出向き「食」に関するボランティア活動を行っています。子供達と一緒に調理実習を行い、「料理することの楽しさ」を感じてもらったり、文化祭ではお菓子や野菜の情報を通じて「食の重要性や役割」などをお話しさせていただくことで子ども達と触れ合うことが出来ました。幼・保育園や小中学校などでは現在、幼い頃から健全な食生活を実践してもうための教育、「食育」が取り入れられていますが、ボランティア活動を通じてその「食育」に少しでも自分が関われたことがうれしかったです。ボランティア活動は人のためになるのは勿論ですが、何よりも活動から得られる経験は大学の勉強と同じくらい自分のためにもなります。みなさんもボランティア活動に積極的にチャレンジしてみてください。

“新潟”を毎日楽しんで生活しています

健康スポーツ学科2年　藤田智博

新潟で一人暮らしを始めて入学当初は、一人で過ごす夜が寂しくて地元の友人や両親に連絡することもありましたが、今は逆に友人が多すぎて（笑）毎日楽しい大学生活をおくっています。アパート選びのポイントだったのは「通学のしやすさ」と「リビングの広さ」。学生専用無料スクールバスを使えば20分、自転車でも20分くらいの場所にアパートを借りました。あと新潟といえば正直「雪」には驚きました。私の生まれ育った地域でも若干の雪は降りますが、さすが新潟です。でも、新潟の友人に聞けば最近はこれでも昔に比べて極端に雪の量が少なくなったようです。しかし私にとって初めてのシーズンとなる新潟の雪景色はとっても魅力的でした。何故かと言えばやっぱりスキー・スノーボード。今年の冬は本当に満喫しました。新潟での1人暮らしは大変なこともありますが、慣れれば毎日楽しいですよ!

学業とアルバイトを両立して頑張っています

看護学科3年　齋藤直哉

現在アルバイトは週4日程度の短期のものを中心にしています。使い道はほとんどが生活費。以前は飲食店、サービス業等のある程度長期のアルバイトもやったこともありましたが、急遽入る予定などの対応がなかなか難しく、現在は短期のアルバイトが中心です。短期のアルバイトですと、時間的にも1日の仕事から半日の仕事、深夜の業務があり、ある程度自分の都合に合わせられます。部活動や授業日程にも合わせることができるため、学業とアルバイトとの両立も可能です。アルバイトの求人は大学にも掲示コーナーがあり、様々な求人を探すことができます。みなさんも無理のない範囲内で、都合にあう色々なアルバイトを探してみてください。

充実の一人暮らしを満喫しています

作業療法学科2年　渡邉裕也

地元を離れて1人暮らしをする前は「いつでも自分の時間があって、友達もいつでも呼べて楽しいことばかりだ」と考えていました。しかし実際に1人暮らしをしてみて、入学当初は「生活と学業の両立の大変さ」や「友達ができるかどうか」という不安だらだったことを覚えています。しかし次第に友人もでき、大学生活に余裕が出来てくると充実の毎日が送れるようになり、今はまさに「理想の一人暮らし」を満喫しています。でもそんな中一番大変だったのが家事。1人暮らしでは当然1人でしていかないといけないので、人間としてとても大きな成長ができます。例えば、私は料理が大の苦手でした。しかし今ではではそれなりに上手くなっていると思っています。1人暮らしをすることで人間的にも大きくなれます。不安に考えず、前向きにがんばっていきましょう。

新潟はとっても魅力の多い街です

理学療法学科２年　松倉奈都希

私はよく友人一緒に、新潟市の中心街の万代（バンダイ）や古町（フルマチ）に遊びに行きます。ここには洋服店や飲食店、雑貨店など数多くのショップがあり、どのお店も、とてもおしゃれで楽しみながら買い物をすることができます。きっと自分のお気に入りのショップも見つかると思いますよ。本学から路線バスに乗れば気軽にバスでも行けるので、「おススメ」の場所のひとつです。他にも新潟は夏は海へ出かけたり、冬はスキースノーボードと四季折々の自然も満喫できます。皆さんも是非自分なりの「新潟」の魅力を楽しんでみてください。

1年生は全てが学びの基礎となる科目ばかりです

言語聴覚学科2年　石河ゆかり

「患者さんに信頼される言語聴覚士になること」を目標に早一年が過ぎました。1年は早いものです。言語聴覚士になるためにこの1年間様々な科目を学びましたが、中でも印象に残っているのが「言語聴覚障害概論」。この科目は、言語聴覚障害の歴史や実際の業務内容、言語聴覚士法の成立までの経緯など、言語聴覚士になるための基本ともいうべき大切な事柄を学ぶことができます。また言語聴覚学科教員全員で担当されているので、様々な先生の講義を受けることが出来て非常に勉強になります。この科目は基本となる科目ですので、皆さんも是非しっかり学ぶようにしてください。

目指せ全国制覇!部活動も頑張っています

社会福祉学科3年　安達拓未

私は現在『軟式野球部』に所属しています。練習は大体週2～3回とそんなに多くはないので、勉強に励みながら楽しく練習が出来るというペースでとても気に入っています。また我が「軟式野球部」は毎年のように全国大会に出場する強豪チームであり、昨年は全国大会で8位に入賞しました。当然目標は「全国制覇」!!　素人同然の私でも練習に参加させてもらっていますし、とにかく先輩・後輩の仲がいい!!雰囲気もいい!!最高の素晴らしい「軟式野球部」です。ただいま入部希望者募集中です。気軽に練習を見に来てください。

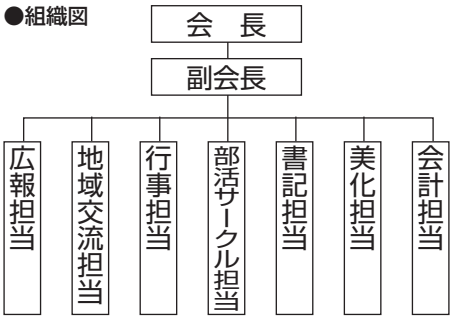
What's 学友会　学友会紹介

こんにちは!学友会です!!今回は、学友会（がくゆうかい）という組織と、その活動内容についてご紹介致します。

学友会とは、中学や高校でいう生徒会のような組織です。私たちは、文化活動やスポーツ活動並びに地域活動を通じて、学生同士の親睦、地域との交流を図り、学生のみなさんがよりよい学生生活を送れるように日々活動を行っています。学友会のメンバーは、理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、義肢装具自立支援学科、健康栄養学科、看護学科、健康スポーツ学科、社会福祉学科の全学科の各学年で2～3人が集まり構成されています。活動場所は、主に第3厚生棟1階の一番奥の部屋（I104）です。学友会の主な活動は、伍桃祭（学園祭）、スポーツ大会などの大学行事の企画運営、部活動の支援、学内の美化活動などです。組織というと堅いイメージを持ってしまうかもしれませんが、そんなことはありません。学友会は学年や学科を越えてとても仲が良く、楽しく、そしてそれぞれが自分の仕事に責任を持って頑張っています!!

学友会は、これからも様々な活動を通じて、大学と地域の活性化を目指していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

●組織図



主な行事と学友会の動き

平成21年	4月	リーダー研修会
		新入生オリエンテーション
	5月	学友会総会
		美化キャンペーン
	7月	夏季スポーツ大会
	9月	美化キャンペーン
	10月	伍桃祭
		美化キャンペーン
		学友会総会(中間決算)
	11月	秋季スポーツ大会
	12月	美化キャンペーン
平成22年	1月	美化キャンペーン
		学友会総会

総会呼びかけ

伍桃祭にて

スポーツ大会・学友チーム

会長　理学療法学科3年　佐藤幸望

皆さんこんにちは☆いつも学友会の活動にご理解、ご協力して頂きありがとうございます!　学友会にはこんな人がいます。例えば…かわいい&美人なみんなのムードメーカー♪、かっこいいバンドマン☆、しっかり者のお姉さん、天然っこ、などなど…とにかくみんないい味だしてるんです!　学友会は全員元気ハツラツ!　いつも楽しく活動してます。そしてなにより、団結力がすごいんです☆

とっても魅力的な仲間がいーっぱいですよ!

副会長　社会福祉学科2年　桐山　渉

私達の学友会は個性豊かで、面白い人ばかりです!　そんなみんなと協力して1つの行事を完成させる、それをやり遂げたときの達成感は半端ないです!　学友会は難しそうな組織だって意識が一気に変わりますよ。そんな学友会をよろしくお願いします!

広報担当　理学療法学科2年　萩行恵美

学友会の仕事ははっきり言って大変な仕事が多いです。でも、その分やりがいがあって、すごく楽しいです。特に伍桃祭は学友会が中心となって行われます。自分たちで企画を出したり、準備をするので、やり終えた後の達成感はすごいです!!

新入生のみなさん、これからの大学生活をenjoyするためにも学友会に入りませんか??

学友会メンバー大募集!!

フレッシュな1年生の力が必要なんです!!　ちょっとでも興味のある人は第3厚生棟1階にある学友会室（I104）のドアをノックしてね!　連絡先 gakuyuu@nuhw.ac.jp

CAMPUS NEWS

2010年4月 医療経営管理学部（仮称）医療情報管理学科（仮称）新設計画中！

深刻な医師不足とそれに伴う医師・看護師の負担増、また質の高い医療の提供を実現する医療環境の整備など、現在、日本の医療は様々な課題を抱え、早急な対策が必要とされています。こうした状況の中、2007年には国が「医師や看護師の業務の一部を医療事務職員へ分担する」とし、全国の都道府県知事宛に通知したほか、2008年には、舛添厚生労働大臣が中心となって取りまとめた「社会保障の機能強化のための緊急対策～5つの安心プラン～」で、医師・看護師業務を分担する「メディカルクラーク」の普及、また安全な医療の実現に必要な環境整備として「医療のIT化」などを主な項目とする具体策を打ち出すなど、本格的な医療政策にも乗り出しています。

このように重大な転換期を迎えた日本の医療において、重要な役割を担う医療事務・秘書分野や医療情報分野は高い注目を集め、高度な知識・技術を有したスペシャリストの育成が強く求められています。

こうした社会の要請に応えるべく、医療経営管理学部　医療情報管理学科では医師不足対策として不可欠となる「メディカルクラーク」を軸とした医療事務・秘書分野の人材育成に主眼をおき、さらに医療のIT化を推進するコンピューター技術に精通した医療情報分野の人材の育成を目指していきます。

また保健・医療・福祉の総合大学であるメリット最大限に活かし、既存の8学科との連携教育を推進し、保健・医療・福祉の幅広い知識を持ち、将来「チーム医療」の一員として、人々のQOLの向上に貢献できる人材の育成を目指します。

目標とする資格			
	●メディカルクラーク	●医療情報技師	●ITパスポート（国）
	●診療情報管理士	●医療秘書技能検定	●日商簿記　など
	●基本情報技術者（国）	●診療報酬請求事務能力認定試験	

2010学内企業就職説明会を実施

2月16日(月)、本学にて一般企業希望者（3年生）対象の「2010学内企業就職説明会」が実施されました。

本年度は、世界的な経済不況という状況の中、参加企業の減少も懸念しておりましたが、実際は昨年度より10社近くも多い29社、計45名の採用担当者にお越しいただくことができました。また本学学生も健康栄養学科・健康スポーツ学科・社会福祉学科の3年生約180名が参加し、大変盛大に開催されました。

当日は最初に全体会を行い、米林喜男副学長と就職センター長藤巻健一准教授による挨拶の後、各企業様から企業PRを行っていただきました。

引き続き、会場を移し行われた個別ガイダンスでは、各企業の人事担当者との個別ガイダンスが行われました。

各企業様からは学生の質問に丁寧にお応えいただき、「学生の礼儀やマナーがしっかりしていて良かった」「目的意識が高く答えにくい質問が多くあった」など、本学の学生に対する好評価をいただくことができました。（本学 企業アンケートより）

また、参加した学生からは「企業の人事担当者と直接お話することができてよかった」、「企業の特色が大変よくわかった」、「OB・OGが来られて職場の声が聞けてよかった」といった満足の声が多数寄せられました。（本学 学生アンケートより）

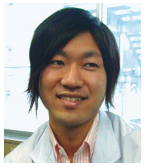
説明会はとても和やかな雰囲気の中、気軽に職場の様子などを伺うこともできたため、学生にとっては今後の進路選択に向けて大きな収穫を得ることのできた大変有意義な機会となったようです。

春のオープンキャンパスを開催しました！

3月28日(土)、本学にて春のオープンキャンパスを実施しました。当日は第1プログラムとして㈱さんぽう　看護医療進学研究会のぬま口せいいち先生より、保健・医療・福祉分野の仕事内容や養成校の状況などをわかりやすくお話ししていただき、その後、第2プログラムとして、大学説明会・学科別説明会・新設学科説明会・各学科のフリープログラムを行いました。特にフリープログラムにおいては、従来よりも体験内容及び講義内容を充実させたとあって、高校生及び保護者の皆様より好評価をいただくことができ、盛況のうちに終了いたしました。本学では今年度もオープンキャンパスにおいて様々な企画を多数用意する予定です。オープンキャンパスに参加し、新潟医療福祉大学をおもいっきり体感してみて下さい！

同窓会

同窓会長のあいさつ



同窓会長
齊 藤 公 二

新潟医療福祉大学同窓会は、平成21年度をもちまして5年目を迎えることとなりました。会員数も平成17年3月から21年度現在まで1740名となり、平成27年には、5000人を超える組織になると推測されます。

本会は、会員の皆様と、準会員である在学生とを繋ぎ、大学との生涯パートナーシップを構築する役目を担っています。具体的な事業としては、広報誌「伍桃」「伍桃だより」の発刊、同窓会総会・首都圏支部総会の開催、国家試験合格祈願鉛筆の配布などがあります。今年度におきましては、同窓会設立5周年記念事業や、在学生のOB訪問も新規事業として予定しております。さらに、今年3月には、同窓会のHPを開設し、より遠隔地・多人数の会員との交流を図れることとなりました。

引き続き、会員相互の交流と親睦を図りつつ、連携を深めて行きたいと考えております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

受験生のみなさんへ

イベント案内

オープンキャンパス

第1回／ 7月18日(土)
第2回／ 8月 8日(土)
第3回／ 9月 5日(土)

大学説明や入試説明はもちろん、全9学科による20種類以上の体験プログラムを用意し、皆さんの「知りたい」全てに応えます!

キャンパスツアー

第1回／ 4月25日(土)
第2回／ 6月20日(土)

入試対策講座など開催ごとに異なるプログラムを用意し、みなさんが『今』知りたい情報を提供します!

伍桃祭（大学祭）

1日目／10月 3日(土)※
2日目／10月 4日(日)
※キャンパスツアーと同時開催

ゲストを招いてのライブなど様々なイベントを実施します!是非キャンパスライフの楽しさを体感してください!

メールマガジン案内

Eメールアドレスが無くても大丈夫!!

新潟医療福祉大学では月1度、本学の様々な情報をメールマガジン「QOLサポーター新潟（NUHW）」として皆さんにお届けしています。オープンキャンパスやキャンパスツアーなどのイベント情報・入試情報といった最新情報や、教員・学生からのメッセージ、先輩の合格体験談など進路決定や入試対策の参考になる特集をはじめ、様々な内容を予定しています。Eメールアドレスをお持ちでなくても、インターネットに接続できるパソコンがあれば、どなたでもご覧いただけます。ぜひ本学ホームページからご登録ください。

ホームページ案内

http://www.nuhw.ac.jp/

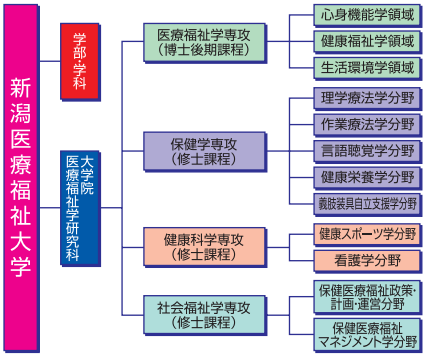
http://www.nuhw.jp/m/
（携帯電話からはコチラ）

新潟医療福祉大学の情報が満載です。新着情報やイベント情報などを随時更新していきます。ぜひご覧ください。資料請求・イベント申込み、メールマガジン登録等もこちらからどうぞ。

大学院

大学院のご紹介

わが国では、大学・大学院における医療・保健・福祉分野の研究・教育組織はまだ極めて少ないのが現状です。本学ではこういった現状を受け、2005年度に修士課程、2007年度に博士後期課程を設け、先進欧米諸国の水準を目標に、教育・研究体制の整備を進め、この分野の教育研究を推進しています。また2009年4月には、さらなる充実を目指し、修士課程保健学専攻に「義肢装具自立支援学分野」を新設しました。本大学院の院生の中には、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・管理栄養士・看護師・健康運動指導士・社会福祉士等々、保健・医療・福祉分野において現役で活躍している方々が多数学生として在籍しており、修了生の中にも大学教員として就職された方、病院・施設に戻り現場の第一線で活躍している方等がいます。本大学院では今後も新しい時代に即した高度専門職業人と優れた教育者・研究者を育成し、医療・保健・福祉に対する社会的ニーズに応えていくことを目的とします。



新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町 1398 番地 TEL025-257-4455㈹ FAX025-257-4456
URL http://www.nuhw.ac.jp/ 携帯サイト http://www.nuhw.jp/m/
【入試事務室】TEL025-257-4459 E-mail nyuusi@nuhw.ac.jp

誌名「QOLサポーター新潟」の由来 世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life, QOL」を豊かにすることが、益々重要になっております。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する（サポート）人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様に本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。